

主 題：涙の夕暮れ 喜びの朝明け

聖書箇所：詩篇 30篇

テーマ：どんな時も神様に対して感謝をささげる者として歩む

今朝、見ていきたいみことばは詩篇30篇です。きょうもみことばひとつひとつが私たちに教えてくれている大切な真理を学んでいこうと思います。まず、いつものようにみことばをお読みします。

詩篇30篇 ダビデの賛歌 家をささげる歌

「:1 【主】よ。私はあなたをあがめます。あなたが私を引き上げ、私の敵を喜ばせることはされなかったからです。:2 私の神、【主】よ。私があなたに叫び求めると、あなたは私を、いやされました。:3 【主】よ。あなたは私のたましいをよみから引き上げ、私が穴に下って行かないように、私を生かしておかれました。:4 聖徒たちよ。【主】をほめ歌え。その聖なる御名に感謝せよ。:5 まことに、御怒りはつかの間、いのちは恩寵のうちにある。夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある。:6 私が栄えたときに、私はこう言った。「私は決してゆるがされない。」:7 【主】よ。あなたはご恩寵のうちに、私の山を強く立たせてくださいました。あなたが御顔を隠され、私はおじ惑っていましたが。:8 【主】よ。私はあなたを呼び求めます。私の主にあわれみを請います。:9 私が墓に下っても、私の血に何の益があるのでしょうか。ちりが、あなたを、ほめたたえるのでしょうか。あなたのみことを、告げるのでしょうか。:10 聞いてください。【主】よ。私をあわれんでください。【主】よ。私の助けとなってください。:11 あなたは私のために、嘆きを踊りに変えてくださいました。あなたは私の荒布を解き、喜びを私に着せてくださいました。:12 私のたましいがあなたをほめ歌い、黙っていることがないために。私の神、【主】よ。私はとこしえまでも、あなたに感謝します。」

さて、これから私たちは、この詩篇30篇を通して真理を学んでいくのですが、その前にこれまでに学んできたことを少し振り返ってみてください。私たちはこれまでさまざまなジャンルにわたる詩篇を通して、大切な教えを学んできました。例えばある詩篇では、苦痛の中にあって、ダビデが神様に対して悲痛の叫びを上げている様子を見ることができました。苦しみを味わい死が間近に迫っています、どうかそんな私を、神様、あわれんでください、助け出してくださいと、そんな嘆きが記されていた詩篇を通して、私たち自身も苦痛に置かれた時、苦難に置かれた時に自分の悲しみや痛みを神様にすべてゆだねることができ、主の助けを信頼することができる幸いを学ぶこともできました。また、ある詩篇ではダビデが神様に対して感謝の賛美をささげている様子を見ることもできました。「神様、感謝します」と、あなたは偉大なお方です、以前私が困難にいた時にも、あなたは私に救いを与えてくださいました、そんなあなたをほめたたえます、そんな喜びや賛美が記された詩篇を通して、私たち自身もすばらしい神様の姿をいつも覚えて、心から喜びにあふれた礼拝をささげる特権や責任を学ぶこともできました。

では、今回見ていく詩篇30篇が一体どのようなものなのかというと、これはその後者、感謝の賛美が記されています。でも、ここに描かれていたダビデの感謝というものは、単に自分を取り囲む敵や困難から助け出されたことに対するものではありませんでした。彼がここで感謝していたことは、自分の犯した罪が原因でもたらされた主の懲らしめからあわれみによって助け出されたことでした。でも皆さん、最初に読んだ時、そのことに気づかれました？もしかしたら少しわかり辛かったかもしれません。実は、この詩篇を記したダビデは、起こった出来事を時系列順には記していませんでした。ですから細かく内容を見て行く前に、まず詩篇全体の大きな流れをつかんでみたいと思います。

もう一度1節から見ると、ダビデは一番最初のところで、「【主】よ。私はあなたをあがめます。」と、神様に対して賛美をささげていました。この詩篇は賛美でスタートしたのです。そして4節では「聖徒たちよ。【主】をほめ歌え。」と、自分だけではなくてほかの兄弟姉妹と一緒にあって、神様をほめたたえようとしている姿を見ることができます。ですから最初の1-5節の部分では、ダビデが神様に対して喜びに満ちあふれ、心からの感謝を、賛美を、周りの者と一緒になってささげている姿を私たちは見て取ることができます。

次に、そのように人々とともに感謝をささげていたダビデは、それをそのまま続けることはできませんでした。彼はそれ以前に自分の身に何が起こっていたのか、その背景の全容を私たちに正直に伝えようとしているのです。詩篇の中盤にある6節を見ればよくわかります。「私が栄えたときに、私はこう言った。「私は決してゆるがされない。」」と。ダビデはある時、神様ではなく自分の力に頼り頼んでいたことがあったということです。これが、ダビデが告白していた自分自身の罪でした。こうして彼は自分がどんな罪を主の前に犯したのか、そしてそれからどのようにして立ち返ったのか、そして立ち返った自分に対して、悔い改めた自分に対して神様がどのように扱ってくださったのかを、6-10節に記してくれていました。そしてそれを受けて、ダビデが11-12節で最後に語っていたことは、最初と同じように、神様に対して感謝をささげようとしていたことでした。自分の罪がもたらした苦しみ、厳しい懲らしめからあわれみによって救い出された彼は、神様に向かってほめ歌を歌っていたのです。

これが感謝の賛美が記された詩篇30篇の大きな流れでした。感謝で、賛美で始まったこの詩篇は、自分自身の罪の告白に続き、最後には感謝へと戻っていくのです。そして、そんなダビデが記したこの詩篇を通して、今の私たちに教えられていることは、神様に対して感謝をささげるべき三つの理由でした。ダビデはこの詩篇を通して、なぜ私たちが神様に対して感謝をささげるべきなのか、三つの理由を教えてくださいました。ダビデは、罪を犯した自分の姿をもって、同じように罪を犯してしまう今の私たちがどのように神様の前に出て、祈りや感謝のほめ歌をささげるべきなのかを模範として示してくれていました。ダビデはどんな理由を挙げてくれていたのでしょうか？どんな模範を残してくれていたのでしょうか？

●表題：「ダビデの賛歌。家をささげる歌」

そのことを考える前に、もう一つだけ注目してほしいことがあります。今回の詩篇についていた表題を見てください。そこには「ダビデの賛歌 家をささげる歌」ということばがつけられていました。以前にも何度かありましたけれども、この表題というのは、多くの場合、その詩篇が記された当時の歴史的背景を読み取る助けとなるものでした。では、今回の表題から何が読み取れるのかというと、まず容易に言えるのは、「ダビデの賛歌」と言われているのですから、この詩篇の著者がダビデだということです。では、その後に出てきている「家をささげる歌」というのは、何のことを言っているのでしょうか？これには多くの聖書注解者たちによって、いろいろな可能性が挙げられています。ある人は、これはダビデが自分自身の建てた家、王宮に対してささげた歌ではないかと考えています。彼のために王宮が建て上げられる様子はⅡサムエル5：11-12に「:11 ツロの王ヒラムは、ダビデのもとに使者を送り、杉材、大工、石工を送った。彼らはダビデのために王宮を建てた。:12 ダビデは、【主】が彼をイスラエルの王として堅く立て、ご自分の民イスラエルのために、彼の王国を盛んにされたのを知った。」と描かれています。自分のために建てられていた王宮を見たダビデが、ある時、神様を忘れて自分の権力を誇っていた。でもその罪を悔い改めてこの歌を記したのではないかと考えている人もいます。そう取ることもできるかもしれません。

またある人は、これはダビデが自分自身ではなくて、息子のソロモンが主の神殿を完成させた時に読めるように準備していた歌ではないかと考えていたりもします。かつてダビデは主のために家を建てること、神様のために神殿を建てたいという願いを持ち続けて生きていたのです。こんなことばを自分の

息子ソロモンに対しても口にするのです。I 歴代誌 22 : 7 に「ダビデはソロモンに言った。「わが子よ。私は、わが神、【主】の御名のために宮を建てようとする志を持ち続けてきた。」と記されています。でも、実際に彼がその生涯において神殿を建てることはありませんでした。それは神様がダビデに対してこんなことばを与えていたからです。そのことばが続く I 歴代誌 22 : 8 - 10 に「:8 ある時、私に次のような【主】のことばがあった。『あなたは多くの血を流し、大きな戦いをしてきた。あなたはわたしの名のために家を建ててはならない。あなたは、わたしの前に多くの血を地に流してきたからである。:9 見よ。あなたにひとりの子が生まれる。彼は穏やかな人になり、わたしは、彼に安息を与えて、回りのすべての敵に煩わされないようにする。彼の名がソロモンと呼ばれるのはそのためである。彼の世に、わたしはイスラエルに平和と平穩を与えよう。:10 彼がわたしの名のために家を建てる。』」と記されています。ですから、ダビデは自分自身が主の神殿を建てるのではなく、息子のソロモンがそれをなすことをわかっていました。でもダビデは主の神殿を建てたいという強い思いを持っていたからこそ、一切何もしないで終わりではありませんでした。その思いを持っていたダビデは、ソロモンが神殿を建て上げる時に必要になるだろうと思って、あらかじめお金、金や銀、鉄や木材、石材といったものを大量に準備していたのです。そのことは時間がある時に I 歴代誌 22 : 14 を読んでもらえればわかります。そして、その用意していた一つとして、神殿が完成した時に読めるようにと、この歌を書き残していたと考えている人もいます。そう取ることでもできるかもしれませんが。ほかにもさまざまな考え方はあります。しかし、残念ながらこれが現実ですと言えるものがわかってはいません。ダビデがいつ、どんな状況の中でこの詩篇を記したのか、その歴史的背景は今回の表題からははっきりとは読み取ることができないのです。

○ダビデの模範：神様に感謝をささげるべき三つの理由

でも、これから内容を見ていけば、内容そのものがどんな状況にダビデがあったのかを私たちにはっきりと教えてくれています。表題はよくわからないものでもありますが、ダビデがこの詩篇で私たちに教えようとしていたことは明白でした。神様に対して感謝をささげるべきその理由というものがはっきりと記されています。そのことをよく考えてみましょう。このみことばを通して、私たちがますます神様に喜びを表わしてほめ歌をささげる礼拝者として成長していく助けになることを心から祈っています。

1. 神様が必要な助けを与えてくださるから 1 - 5 節

神様に対して感謝をささげるべき一つ目の理由が 1 - 5 節に記されていました。それは神様が必要な助けを与えてくださるからです。まず、1 - 3 節に「:1 【主】よ。私はあなたをあがめます。あなたが私を引き上げ、私の敵を喜ばせることはされなかったからです。:2 私の神、【主】よ。私あなたがあなたに叫び求めると、あなたは私を、いやされました。:3 【主】よ。あなたは私のたましいをよみから引き上げ、私が穴に下って行かないように、私を生かしておかれました。」と記されています。まずダビデはここで、「【主】よ。私はあなたをあがめます」と、神様をほめたたえるという自分自身の強い意思を口にしていました。ここに出てきている「あがめます」ということばには、もともと「高く掲げる」といった意味が含まれています。何かを「高く持ち上げる」ということです。そしてここから「ほめたたえる」とか「賛美する」といった意味で用いられることもあります。ダビデはここで自分の愛する主を高々と掲げ、ほめたたえようとしていました。彼の心には神様をただただあがめたいという強い思いが満ちていたのです。また「私はあなたをあがめます」と、ダビデが口にした時に、それは同時にあることをも意味していました。それはダビデがこの主の前に自分自身をへりくだらせていたということです。彼は自分を高ぶらせるのではなく、主を高く掲げてほめたたえようとしていました。だれかを掲げようとしたら、自分は下に下がらないといけないのです。両方を掲げることは絶対にできません。彼は主の前にへりくだって礼拝をささげていました。そんな謙遜な態度をここで表していたのです。

では一体どうして彼はそんな態度をとっていたのでしょうか？ 1節の続きに「あなたが私を引き上げ、私の敵を喜ばせることはされなかったからです。」と記されていました。あなたが私を引き上げてくださったのだと書いていました。ダビデはほかのだれでもない、まず神様が自分のことを引き上げてくださったからこそ、自分も神様を高く掲げたいと願っていました。ここで「引き上げ」と出てきたことばにはもともと何かを「汲み上げる」とか「吸い上げる」といった意味があります。まるである人物が井戸の底から水を汲み上げるために、バケツを下してそれを引き上げる、そんな姿をこのことばは描いているのです。同じことばが箴言20：5にも用いられていました。「人の心にあるはかりごとは深い水、英知のある人はこれを汲み出す。」、知恵のある人がほかの人の心の奥底にある思いや考えを汲み出すことができるように、ダビデはここで神様が自分を奥底から引き上げてくださったと言うのです。詳しいことは、この後見ていきますけれども、このことばを記したダビデは、かつてまさに死の間際にまで追い込まれていました。彼は死にそうになっていたのです。しかし、そんな絶望的など底から神様によって助け出されたからこそ、神様によって引き上げられたからこそ、その神様をほめたたえようと心に決めていたのです。

また彼は、神様が自分のことを引き上げてくださったことだけではなくて、神様が自分の敵を喜ばせることをされなかったことも理由の一つとして挙げ、そのことを感謝していました。ダビデがここで口にした「私の敵」が、だれのことを指しているのかはここではよくわかりません。これまでの詩篇でも目の当たりにしてきたように、彼は常にさまざまな敵にその身を追われ、苦しめられていました。だからこそ、ここでも同じように彼に迫っていた敵によって、いのちの危機に瀕していたと考えることもできます。でも文脈をよく見てみると、ここでの敵というのは、どちらかという、そういった実際の敵というよりも、彼自身が抱えていた霊的な問題や健康面における問題を表しているを取ることができます。

続く2節に、「私の神、【主】よ。私^があなたに叫び求めると、あなたは私を、いやされました。」と記されていました。「いやされました」ということばが出てきていました。これは、「壊れたものを修理する」といった意味で用いられることもありますけれども、多くの場合は「病気をいやす」とか、「傷ついたらだを治療する」といった意味で用いられます。おもしろいことに、このことばはある時には「医者」と訳されることもありました。創世記50：2には「ヨセフは彼のしもべである医者たちに、父をミイラにするように命じたので、医者たちはイスラエルをミイラにした。」と記されています。「医者たち」、病気をいやすような存在のことをこのことばを表しているのです。ですから、いやされたと言った時に、病気のことを言っていると取ることはもちろんできますし、もう少し大きな意味で考えると、これは霊的な問題をいやすこと、罪に対する赦しを表すこともあります。みことばを見てみれば、そのような例を幾つか見て取ることができます。例えば、エレミヤ3：22に「背信の子らよ。帰れ。わたし^があなたがたの背信をいやそう。」「今、私たちはあなたのもとにまいります。あなたこそ、私たちの神、【主】だからです。」と書いていました。また、私たちがよく知っている箇所の一つ、イザヤ53：5にも「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」と書かれていました。ですから、ダビデがここで「私^があなたに叫び求めると、あなたは私を、いやされました。」と口にした時、彼は単に健康面において病をいやされたという話をしていただけではなく、霊的な問題、自分が犯した罪に対する赦しについても触れていたと考えることができるのです。

そしてそんな彼は、3節にもこのように続けていました。「【主】よ。あなたは私のたましいをよみから引き上げ、私^が穴に下って行かないように、私を生かしておかれました。」。ダビデは再び神様が自分のことを引き上げてくださった、特に「よみから」引き上げてくださったと口にしていました。この「よみ」というのは、旧約聖書を見た時に、「墓」や「死」を表すために用いられたりします。でも、これはも

っと言えば、「差し迫った死」といった意味をも持っていることばです。つまりダビデは神様が自分の身に差し迫っていた危うく死にかけそうな危機的状況から助け出してくださったということを感じていました。後に出てきている「穴に下って行かないように……生かしておかれました」というのも同じことです。ダビデは死にかけていました。自分の犯した罪によって、今にも死にそうになるほどの懲らしめを神様から受けました。恐らく大きな病を患っていたのでしょう。しかし、そのような中にあった時に、主があわれみによって自分を引き上げてくださった、自分のことを助け出してくださったことを覚えていました。だからこそ、彼は主の前にへりくだって心からほめたたえようとしたのです。この方を高く掲げようとしていました。彼は自分の叫びに答えて主が助けを与えてくださったことに対して、感謝にあふれてほめ歌をささげようとしていました。それが1-3節に記されていた内容でした。

大切なのは、彼はそのほめ歌をたったひとりだけでささげようとはしていなかったということです。確かに彼は神様に対して賛美をささげようとしていました。でも彼はほかの兄弟姉妹たちと一緒にあって、それをしようとするのです。それが4-5節に「:4 聖徒たちよ。【主】をほめ歌え。その聖なる御名に感謝せよ。:5 まことに、御怒りはつかの間、いのちは恩寵のうちにある。夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある。」と記されています。ダビデは、こうして同じ神様を愛する民と一緒にあって、主に賛美をささげようとしていました。神様の聖なる御名を、ほかの何物とも一線を画すこの主の偉大なご性質、偉大なみわざを覚えて、この方にふさわしい礼拝をささげようとしていたのです。神様によって助け出されたダビデは主の前だけでなく、ほかの人々の前でも喜びに満ちあふれていました。

ここで少し考えてみてください。私たちはこのようにしてダビデが何度も繰り返す、自分だけではなくて、同じ神様を愛する兄弟姉妹と一緒にあって主をほめたたえようとしているその姿を詩篇を通して見ることができました。ダビデは自分の愛する神様がどれほど偉大なお方で、どれほどすばらしいお方なのかということ、すばらしいことをなされたのだということ、ほかの人と喜んで分かち合いたいと、その機会を常に追い求めていたのです。では私たちはどうでしょう？神様がこんな驚くべきことを自分が歩みのうちになしてくださいました、ひどい苦しみを経験したけれども、その中で主はこんなあわれみを教えてくださいました、示してくださいました。苦しい中にあるけれども、神様は私にこんなことを教えてくださいました。そのような神様に対する感謝や喜びを、果たして私たちは最後にいつほかの兄弟姉妹と分かち合ったのでしょうか？ダビデはそのような感謝を喜んでみずから行っていました。そのことはもちろんお互いの信仰の励ましになったことは言うまでもありません。でも、私たちがここで何よりも覚えておかなければいけないことは、ダビデは自分の愛する神様が自分だけでなく、ほかのすべての人々からも常にほめたたえられる存在だと確信していたということです。

ダビデは自分の愛する神様が自分だけのものだと考えていませんでした。この方は常に自分だけではなく、すべての人からほめたたえられるべきだと確信していたのです。だからこそ、彼は感謝することがあれば、その機会を用いてほかの人に喜んでそれを伝えようとしていました。どのようなものであったとしても、その機会を用いてほかの人とその主の偉大さを分かち合おうとしていました。私たちはどうでしょう？私たちは日々の生活の中であって、すばらしい神様のみわざを見ることはたくさんあります。神様がこんなにすばらしいことをなされたのだと、私たちはそのことを味わうことができます。そのことをそれぞれは主に対して賛美するかもしれません。では、ほかの人に対してはどうでしょう？私たちの神様は自分だけではなくて、ほかの人からもほめたたえられるべきお方だと、果たして私たちはそう信じているのでしょうか？この方は絶対周りの人からもほめたたえられるべきだ、もしそのことを確信するのであれば、私たちにできる一つのこと、私たちのうちになされたその主のすばらしいみわざを、主のすばらしいご性質をお互いの間でたたえ合うことです。ダビデはそのことをしていました。そのことが彼にとっての喜びでもありました。では私たちはどうでしょう？

ダビデはこうして主にほめ歌をささげようとしていました。そしてそのことに関して、この箇所ですべて鍵となる表現が5節に記されています。「御怒りはつかの間、いのちは恩寵のうちにある。」と書いていました。ここで出てきている「御怒り」というのは一体何に対する怒りなのでしょう？これはダビデの罪に対して燃え上がった神様の怒りでした。後で見ますけれども、自分の力を過信して高ぶり、神様を忘れたダビデに対する厳しい怒りでした。しかし同時に、その怒りというものがここでは、いつまでも続くものではなく、束の間のもなのだとダビデは言うのです。主はその罪を悔い改めてへりくだった者に対しては、いつまでも怒っておられないのだ、恵みを与えてくださる誠実なお方なのだというのです。高ぶる者に対しては敵対する、怒られる。でもへりくだる者に対しては恵みを与えてくださると。このことはペテロもⅠペテロ5：5で「神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。」と書いていました。

もちろん聖なる神様は高慢さを含め、どんな罪に対しても必ず怒りを燃やされるお方です。しかし、その怒りは束の間のものでした。5節の続きに「夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある。」と書いていました。ここでダビデが言わんとしていることも同じでした。確かにダビデは罪を犯して神様から死の危険を感じるほどの厳しい懲らしめを受けました。その懲らしめによって、夜、涙を流すこともあったでしょう。しかし、その罪を心から悔い改めた時に、主はあわれみを示して罪を赦してください、その試練から助け出してくださいと言ったと書いています。ここでのポイントは、終わりのない夜がないように、必ず次の日には朝がやって来るように、どんなに厳しい試練も終わらないことは決してないということです。そしてその苦しみや懲らしめが束の間のものである者に対して、罪を赦されて主のうちに喜びや平安を見出した者の祝福はいつまでも続くものだというのです。これは聖書の中でも繰り返し教えられていることでもありました。パウロもⅡコリント4：17に「今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。」と書いています。またペテロもⅠペテロ1：6-7に「：6 いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならぬのですが、：7 あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れるときに称賛と栄光と栄誉になることがわかります。」と。数多くの試練や困難を味わったパウロやペテロは、この真理をわかっていました。この地上における苦しみというものは一時的なものにすぎないと。それよりもその後を待っているものの方がいつまでも続くすばらしいものなのだと。

もしかしたら今まさにひどい困難に直面して、終わりの見えない状況に悲しみや恐れを抱いている方が、その試練がいつまでも続くかのように感じて希望を見出せないような中にある方もいるかもしれません。このみことばが私たちに教えてくれていることは、私たちがこの地上で味わうどんな苦しみも、この地上での生活を終えて、天で喜びにあふれる永遠の時を考えれば、一瞬のものだということです。だからこそこの主にある希望を覚え続けることです。主の約束を心にとめ続けることです。私たちはさまざまな問題に直面することがあります。時に罪を憎まれる主は、私たちに懲らしめを与えられることもあります。しかし、それは私たちひとりひとりがますます聖くなっていくために必要なものとして、愛のうちに神様が与えてくださるものなのです。またそれに加えて、私たちよりも私たちのことを知っておられる神様は、私たちが耐えられないほどの試練に遭わせることはないのだということ、むしろ脱出の道を備えてくださるのだということをお約束してくださっていました。そんなあわれみ深い神様が、誠実な神様がともにいてくださるのです。だからこそ、必要な助けを与えてくださる方に信頼して、この方のうちに喜びを見出して歩み続けることです。ダビデは罪を犯しました。そして大いに苦しみました。しかし、罪を心から悔い改めた彼を、神様はあわれんで必要な助けを備えられました。涙の夕暮れを迎えても、喜びの朝がやって来たのです。そのすばらしさを味わったからこそ、ダビデはただ主をほめたたえていました。神様は必要な助けを与えてくださる、それが神様に感謝をささげるべき一つの理由でした。

2. 神様が懲らしめを通して心を砕いてくださるから 6-10節

次に、神様に対して感謝をささげるべき二つ目の理由が6-10節に記されています。それは、神様が懲らしめを通して心を砕いてくださるからです。6節をよく見てください。ダビデは自分の犯した罪についてこのように述べていました。「私が栄えたときに、私はこう言った。「私は決してゆるがされない。」」と。ここで出てきている「栄えたとき」ということばには「豊かさ」や「裕福さ」といった意味が含まれています。でもそれ以上に、この「栄えたとき」ということばには「自己満足」や「ひとりよがり」といった意味もあるのです。要するに、このことばは単に豊かさだけを表していたのではなく、その豊かさから生まれてきやすい人の間違った態度というものを表していました。そしてこの豊かさから出てくる自己満足、ひとりよがりの態度というものに関しては、聖書の中で何度も何度も警告されていたものでもありました。例えば、イスラエルの民に対して、申命記8：11-14でこんな警告がなされています。「:11 気をつけなさい。私が、きょう、あなたに命じる主の命令と、主の定めと、主のおきてとを守らず、あなたの神、【主】を忘れることがないように。:12 あなたが食べて満ち足り、りっぱな家を建てて住み、:13 あなたの牛や羊の群れがふえ、金銀が増し、あなたの所有物がみな増し加わり、:14 あなたの心が高ぶり、あなたの神、【主】を忘れる、そういうことがないように。」と。またユダの王エホヤキムという人物に対しても、エレミヤ書の中にこんなことばが残されています。エレミヤ22：21に「あなたが繁栄していたときに、わたしはあなたに語りかけたが、あなたは『私は聞かない』と言った。わたしの声に聞き従わないということ、これが、若いころからのあなたの生き方だった。」とあります。イスラエルの民に対しても、またエホヤキムに対しても厳しく警告されていたことは同じでした。人がいろいろなものに満ちあふれ繁栄すれば、そこにはいつも神様を忘れ、自分の力に頼り頼む高慢さが生じるようになりますよと。そしてダビデもその罪に陥ってしまったのです。

ダビデは王様でした。たくさんの財産も立派な建物も、多くの家来にも恵まれていたことでしょう。しかし、それらは神様から与えられたものであって、彼自身が自分の力で手にしたものではありませんでした。神様を忘れていた彼が持っていた問題は“プライド”でした。彼は自分の力や知恵、持ち物に信頼を置いていました。それらに満足を見出していたのです。別のものに満足を見出していたら、ほかのものに耳を傾けようとはしないのです。彼のプライドにあふれていた心というのは、神様のことをほめたたえるのではなく、私は決して揺るがされないと、自分自身をほめたたえていたのです。みこころにかなった歩みをしていた、あのダビデですらこんな罪を犯していました。そしてそんなダビデには神様の厳しい懲らしめが与えられるのです。

特に7節の後半に注意して見ると、「【主】よ。あなたはご恩寵のうちに、私の山を強く立たせてくださいました。あなたが御顔を隠され、私はおじ感っていましたが。」と続いていました。神様がプライドにあふれていたダビデにしたことは、ご自身の御顔を隠されることでした。「御顔を隠す」というのは、以前にも何度かほかの詩篇でも登場していましたが、簡潔に言えば、神様があわれみを示すのではなく、ご自身の恵みや祝福を与えないようにされるということです。つまり、自分の力に頼り頼んで主を忘れていたダビデに対して、彼が悔い改めるまで神様はご自身の愛や祝福を注ぐのをやめられたということです。そうすると、ダビデは「おじ感って」いたのです。「おじ感」うというのもイメージがしやすいことばかもしれませんが、「突然恐怖に襲われる」とか、「ひどく怖がり、震えおののく」といった意味があります。恐ろしさの余り、震えおののくのです。ダビデは周りを豊かさで囲まれていた時は、自分の力を過信して、私は決して揺るがされないと豪語していました。でもダビデに対して、神様がその御顔を隠されたことによって、彼はすぐに震え上がり、簡単に揺らいでしまっていたのです。神様が自分とともにおられないことがわかった彼のうちには、平安ではなく恐れが、喜びではなく絶望が広がっていました。

神様はそのようにして懲らしめを通して、ご自身のしもべであるダビデの間違った態度、愚かな心を砕かれたのです。そして砕かれたダビデがどのように応答していたのかということが8節以降に書いてありました。「:8 【主】よ。私はあなたを呼び求めます。私の主にあわれみを請います。:9 私が墓に下っても、私の血に何の益があるのでしょうか。ちりが、あなたを、ほめたたえるのでしょうか。あなたのまことを、告げるのでしょうか。:10 聞いてください。【主】よ。私をあわれんでください。【主】よ。私の助けとなってください。」と。彼がしていたことは、ただ主のあわれみを請い求めることでした。言いかえれば彼は罪を犯した愚かな自分に対して、本来は絶対に値しないもの、神様の恵みを求めていたのです。ダビデは自分自身の罪深さに気づきました。自分の高慢さやプライドがわかりました。本来であれば、すべてが神様からのものなのに自分自身の力を誇っていた、その愚かさを認めていました。だからこそ、彼は主があわれみを示してくださって、助けを与えてくださることをへりくだって求めていたのです。

でも、これを聞いてある人は思ったかもしれません。少し待ってください、彼があわれみを求めてへりくだっていたのわかりました。だとすれば、9節のことは少しおかしいのではないですかと。9節を読むと、彼の態度が大きく感じるのです。9節に「私が墓に下っても、私の血に何の益があるのでしょうか。ちりが、あなたを、ほめたたえるのでしょうか。あなたのまことを、告げるのでしょうか。」と書いていました。確かに一見すると、あわれみを求めているはずのダビデが神様とある種の駆け引きをしているかのような印象を受けるかもしれません。死にかけの彼が自分自身のことにとらわれて、神様、あなたは私を助けた方がいいですよ、もし自分が死んでちりと化してしまえば何の得もありません。むしろあなたは自分をほめたたえる礼拝者を失ってしまうことになるのですよ、だから私のことを助けた方がいいですよと。果たしてダビデはこんな傲慢な態度をここで取っていたのでしょうか？もちろん、そうではありませんでした。彼はここで自分のことにとらわれていたのではなく、神様のことにとらわれていました。もっと言えば、罪を犯した時には自分の栄光がたたえられることを望んでいたダビデでしたが、ここでは神様の栄光が人々の間でほめたたえられることを望んでいたのです。だからこそ、彼はあわれみを求めて祈りをささげていました。神様、本来であれば私には死が値します、でも私をあわれんで生かしてください。赦されるのであれば、私はあなたの栄光を人々に大胆に伝えますと。それも死んで墓に入れられてしまえばできなくなってしまいます。こんな愚かな自分にさえどれだけ神様が誠実でくださったのか、そのことを宣べ伝えることが死んでしまえばできなくなってしまいますと。だから、あなたの栄光がますます人々の間で明らかにされるために、私を助けてください、恵みによって私を生かしてくださいと。ダビデはそのようにして、自分には値しないあわれみによる救いを求めていました。

私たちがここで何よりも覚えておきたいことは、死を間際にしたダビデの心には、もはや自分自身のことではなく、神様の御名があがめられることがあったということです。彼は死にかけていたのです。その死を前にして、神様のことだけに彼の心は向いていました。彼の自分勝手な高ぶった心は、主の厳しい懲らしめを経て砕かれていたのです。そして、そんなへりくだった者へと変えられていたダビデの祈りは聞かれました。もう既に1-5節で見ましたけれども、神様はそんな悔い改めたダビデのことをあわれんで主からの助けを与えられていたのです。主の懲らしめはダビデに死を感じさせるほどの大きな痛みを与えました。しかし、その懲らしめがあったからこそ、彼のうちにあった罪は砕かれ、彼の心は大きく変えられました。それが懲らしめを用いて神様がなされたことだったのです。そして、そんな主の働きを味わったからこそ、ダビデはただ主をほめたたえようとしていました。神様が懲らしめを通して心を砕いてくださること、それが感謝をささげるべき二つ目の理由でした。

3. 神様が喜びを与えてくださるから 11-12節

そして最後、三つ目に神様に感謝をささげるべき理由が、残りの11-12節で挙げられていました。三つ目の理由は、神様が喜びを与えてくださるからです。11節には「あなたは私のために、嘆きを踊りに変えてくださいました。あなたは私の荒布を解き、喜びを私に着せてくださいました。」と記されています。

した。ここで「荒布」ということばが出てきていましたけれども、これは身に着ける人々が悲しみや悩み、痛みや失望を表す時にまとっていた衣服でした。例えば愛する息子ヨセフがいなくなったことを知ったヤコブが荒布をまとっていた様子を、創世記の中に見て取ることができます。創世記37：34には「ヤコブは自分の着物を引き裂き、荒布を腰にまとい、幾日もの間、その子のために泣き悲しんだ。」とあります。荒布というのは、そんな大きな悲しみや悲痛を表わすのに用いられるものでした。しかし、そんな悲しい状況でさえ、神様は変えることができるお方だったのです。ダビデはここで、神様は私をあわれんで、自分の嘆きを踊りへと変え、荒布を解いて喜びを着せてくださったのだと言っていました。死の苦しみを味わっていた彼の心のうちには、もういっさいの失意や恐れは存在していませんでした。彼の心にあったものは喜びであり、神様に対する感謝だけだったのです。

もちろんダビデはそんなすばらしいみわざをなしてくださったのが自分ではなく、神様であることを忘れてはいませんでした。だからこそ6節では、「私が栄えたときに」、「私はこう言った」、「私は決してゆるがされない。」と、「私」ということばを繰り返していたのに対して、この11節では「あなたは私のために」、「あなたは私の荒布を解き」と、「あなた」に対して目を向けていました。言いかえれば、主にに対して心をとめていたということです。そしてほかのだれでもない主のあわれみが自分のうちに喜びを与えてくださったと覚えていたからこそ、ダビデはそのことを賛美し、その神様にいつまでも感謝をささげていたのです。彼の魂が黙っていることなんてないようにほめ歌を歌っていたのです。

ここで少し考えてみてください。ここで「私のたましいがあなたをほめ歌い、黙っていることがないために」と彼が言っていました。彼の心が神様に対してほめ歌を歌わずに黙っていた時とはいつだと思えます？それは彼自身が自分自身に拠り頼み、自分の力を誇りとしている時でした。自分の権威や栄光をたたえていた時に、その口には神様の栄光をたたえる賛美などなかったのです。神様にではなく、自分自身に焦点が向いている時、そこには主への感謝などなく、その魂は黙っているのです。これは私たちも同じです。私たちが自分自身に焦点を置いている時は、私たちの心から神様に対する感謝や賛美が出てきません。しかし、そんな愚かな心を神様はあわれみによって砕いて、ダビデの心を一変させられました。ダビデのその嘆きを喜びへと変えられました。だからダビデはその主のすばらしさに感謝して、とこしえまでもこの方の栄光をほめたたえようとしていたのです。ダビデは同じ過ちを繰り返そうとはしませんでした。二度と罪を犯さなくなったわけではありません。でも、自分の誤った心を砕かれた彼は、同じ罪を犯さないように、自分に目を向けるのではなく、ただ主に心をとめて、そしてこの方にならざる礼拝をささげようとしていました。これが、ダビデが私たちに示してくれていた、私たちに残してくれていた彼の模範でした。

○ まとめ

では、私たちはどうでしょうか？これまでダビデの姿を学んできたのですけれども、果たして私たちは主にどんな時も感謝をささげる者として歩んでいるのでしょうか？自分の歩みをよく振り返ってみてください。普段私たちはどんな時に感謝を忘れてしまったり、心から賛美が失われてしまいやすいでしょうか？もちろん、さまざまな場面で私たちはチャレンジを受けることがあるでしょう。この詩篇でも見てきたように、大きな試練に直面し、その試練がいつまでも続くかのように思える時に、私たちは心からの感謝を神様にささげることの難しさを感じてしまうことがあるかもしれません。試練を受ける時の一つの大きなチャレンジは、神様ではなく自分自身を見るようにと仕向けることです。そして私たちが自分自身のことにとらわれ過ぎてしまえば、神様に信頼することも、神様に頼ることも、神様に感謝をささげることも忘れてしまいます。それだけでなく、私たちの持っているプライドというものが心のうちから感謝を奪い去ってしまうこともあるかもしれません。日々数多くのもを私たちは与えられていますが、それらがすべて神様から恵みによって与えられていると、いつも覚えて歩んでいるでしょうか？神様のうちに信頼を置いているのでしょうか？それとも神様を忘れて、自分自身や何かほかのもの

うちに信頼を置いて歩んでいるでしょうか？もし私たちが神様を別の何かと置きかえて、神様から目をそらしてしまえば、私たちの心は主をほめたたえることなどできなくなってしまいます。だからこそきょうのみことばが教えてくれていたことをいつも覚え続けることです。聖書は地上で味わう私たちの試練というものがいつまでも続くものではないということ、一時的で、終わりがあるものだとも明らかにしてくれていました。それに加えて、神様が試練を耐え抜くための力や助けを恵みによって与えてくださること、何よりもこの方のうちにある喜びや祝福を、神様を愛する者たちは永遠に楽しむことができると約束してくださっていたのです。だとすれば、この神様の誠実なご性質を疑うのではなく、そのことを信じることです。この方の約束を信じて主の助けを期待し、祈り求め続けることが私たちにはできません。

また同時に、私たちがみことばを見る時に、すべてのものが神様のものであり、そしてこの方に栄光を帰することこそが私たちにとっての喜びであり、責任であるということも教えてくれていました。自分自身に拠り頼み、自分の栄光をたたえるのではなく、主に拠り頼み、主の栄光をほめたたえる者として歩むことこそ、決して揺るがされることのない歩みだと言うのです。私たちがどこに目をとめ続けるのかということは非常に大切なことになります。この主の御力とみわざに心をとめ続け、そしてこの方にほめ歌を歌い続けることです。

もしまだこの主を個人的に知らない方がこの中におられるのだとすれば、よく考えてみてください。神様を愛する者に対する主の怒りは一時的なものなのだとすることを、ダビデは確かに教えてくれました。しかし、聖書は、神様に逆らって生きる者に対する御怒りは一時的なものではなく、永遠に続くものであるとはっきりと教えてくれます。この人生にあって、この地上での歩みにおいて少しは平安を持つことができるかもしれません。でも神様は、神様に逆らって歩む罪人に対して、死後必ず厳しい怒りを、さばきを与えられると聖書は約束しています。そのように歩み続ける必要はありません。聖書は神の御怒りを受けるべき私たちひとりひとりの罪人のために、神の御子イエス・キリストがこの地上に来てくださり、この方が私たちの代わりに十字架にかかってくださったこと、そしてこの方の犠牲と復活を通して、私たちに罪の赦しを与えてくださったのだということを記してくれていました。だからこそ、もしイエス・キリストを自分の救い主として知らない方がいるのであれば、きょうこの方を受け入れて、この方に信じ従う歩みを始めてください。この方のうちにまことの喜びが、まことの救いがあります。

兄弟姉妹の皆さん、ダビデは自分の愛する神様が必要な助けを与えてくださり、懲らしめを通して心を砕いてくださり、そして心に喜びを与えてくださるからこそ、どんな時も感謝をもってほめ歌をささげていました。私たちは日々どんな感謝をささげて生きていくのでしょうか？主に礼拝をささげ続ける者として、感謝をささげる者としてともに成長して行きましょう。